
走る密室

takosashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
走る密室

【コード】
N3420T

【作者名】
takosashi

【あらすじ】
車を運転しながら絞殺された被害者…そのトリックは？ ショートショート風に書いてみました。

死亡事故の多い月だった。

その事故も、よくある事故、トータルすれば風呂で死ぬ人よりも少ない方に数えられる、不幸な事故と思われた。

だから、玉木と井岡のふたりは、なぜ自分たちが呼ばれたか、納得がいかなかった。

「事件性があると判断したんですかね？」

「さあな。なにか、交通事故にしては不自然な点がある、交通課の管轄でない可能性がある、と…なんか煮え切らない言い方だったな」

「まあ、現場を見てみますか」

被害者はK市の専門学校たけなかえりの学生、武中絵里。

事故あるいは事件の発生は、午後11時半。

被害者の運転していたと思われるラパンは、峠道のど真ん中に停車していた。

被害者はシートベルトを締めており、ブレーキ痕はなく、やや制限速度より遅く走行していたと見られ、ヘッドライトが点いたまま、エンストしていた。

「どっかにぶつかったわけじゃないんだな、これは」
井岡は玉木に、

「しかも…フロントガラスがめっちゃめっちゃに壊れてますね。でも他に車の損傷はなし…なるほど、こりゃ不自然ですね。でかい石でも落ちてきたんじゃない？」

「そうあって欲しいな…」

交通課の中西が走ってきた。その表情から、玉木は、なにか面倒なことになっている、と直感した。

「ガイシヤの死因が特定されました」

「石で頭を打ったのか？」

「違います。頸動脈が潰れているそうです、あと、首の骨も損傷している」

「なんだって…？」

「ガイシヤは絞殺されたんです」

「車を運転している人間をどうやって絞め殺す？ ホシはスパイダーマンか？」

玉木は半ばヤケになりかけていた。これは厄介なヤマダ…

「スパイダーマンだって無理ですよ」

「まあ、仮に、運転中の人間の首を、絞めたでしょう…：そうしたら、どうなる？」

「死に物狂いで抵抗しますね」

「そうだ…：運転などそっこのけでな。そして、車は山側に衝突するか、谷底に転落する」

「そうなるのが普通ですね。それにしても、フロントガラス以外、車の損傷はない」

「一体どういうことだ、こりゃ！」

不可能犯罪…：その言葉が、玉木の頭をよぎった。

「ホシは、同乗していた人間とは思われません」

「なぜだ？」

「今の話のとおりですよ。ホシの方の命まで危ないですから」

「じゃあ…：走っている車の、外側から…？」

「フロントガラスを突き破って襲いかかり、一瞬にして首を絞めてしまう…」

「それこそスパイダーマンだ」

翌日：

「玉木さん、鑑識の方からですが…」

玉木は山のように吸殻の積まれた灰皿に、さらにもう一本突き刺すと、

「なんだ？」

「ガイシャの首を絞めたのは、付着していた繊維から、登山用のロープだと分かりました」

「…そうか」

「変でしょう？」

「お前もそう思うか？ 井岡」

「なんでそんなものを、用意する必要があっただんでしょうか」

「待て…少し、整理してみよう」

「はい」

「普通、首を絞めて人を殺すには、7〜8分ほどはかかる。ガイシャはその間、首を絞められつつ、制限速度を守って運転を続けていた…そして死亡し、車は何事もなく、ごく自然に停車した。つまり、エンストして止まった…ということになる」

「ありえませんか」

「そうだ。ありえん。たぶん、その登山用ロープってのは、頑丈なんだろうな？」

「2トンの重さにも耐えられます」

「そして…壊れていたフロントガラス…懸賞金を出すか？ トリックを見破った者には100万円とかな」

井岡が言った。

「じゃあ、私に100万円ください」

「なに?!」

「トリックがわかりました。あくまで可能性ですが」

「は、早く言え！」

まず、ガイシヤは何者かに脅されていたと思われる。ナイフか拳銃か…

そして、車に乗るよう強要される。そして、首にロープを巻きつけられる。そして、フロントガラスに小さな穴を開け、ホシはそこへロープを通すんです。

そしてロープの先端を、もう一台の車の、後ろに結びつけ、固定する。

「なるほど…別の車で引っ張って締めたわけか」

「そしてホシはその車に乗り、じりじりと走りだす…すると、ガイシヤはどうしますかね？」

「…運転するしかないな。ホシの車について行かなければ、首がどンドン締まるからな」

そう、ガイシヤは必死で運転し、ホシの車について行こうとする。しかし限界があります。やがて抵抗むなく、意識を失ってしまう。車はそのまま惰性でしばらく走り、エンストして止まる。

そしてホシは車を止め、ロープを回収し、フロントガラスをハンマーで叩き壊す。ロープを通した穴をカモフラージュするためです。

「いかがです？」

「なんと…分かってみれば単純なことだ。これで立件できるぞ」

玉木と井岡は、容疑者を特定すべく、捜査にのり出した。

(終)

(後書き)

いかがでしたか？ トリックが途中で分かった方、わからなかった方、当たり前ですがこれは実際には無理なトリックです。間違っても試したりしないでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3420t/>

走る密室

2011年7月20日13時47分発行